

# バッチャン焼の過去と現在

ハノイ大学 グエン・ティ・ラン・アイン

長崎大学 野上 建紀

## The Past and Present of Bat Trang Ceramic

NGUYEN THI LAN ANH (Hanoi University)

NOGAMI Takenori (Nagasaki University)

### Abstract

Located on the outskirts of Hanoi, Bat Trang is well known for high-quality a traditional ceramic village. With regard to origins, there are many legends about the formation of the village. According to Complete Annals of Dai Viet, Bat Trang firstly appeared in 1352. On the other hand, according to the historical epic, people from Bo Bat Commune, Ninh Binh province settled in this land under Ly Dynasty (1010 - 1225). When King Ly Cong Uan relocated the capital in Thang Long, many businessmen, crafters from many areas go to settle down there. Many potters came and built the kilns in Bat Trang because this village is located in an area rich in clay. Lying on the edge of the Red River, between Thang Long and Pho Hien which are two ancient trade centers in the north of Vietnam during 15th – 17th century, Bat Trang's ceramics were favorite products not only in domestic market but also foreign ones thanks to Japan, Chinese and Western trading boats that passed by. However, in the 18th-19th century, the ceramic products couldn't be exported to foreign countries because of the restricting foreign trade policy of Trinh, Nguyen dynasty. Only since 1986, thanks to economic reforms and development, more attention has been vested in the village and the world gets a chance to know more about Vietnamese ceramics through impressive high quality exported ceramic products of Bat Trang. Nowadays, Bat Trang ceramic products are famous for not only in Vietnam but also in other countries in the world. The products of the villages has been exported to some countries like Japan, Korea, America, and members of European Union since 1990.

**Key Words:** Bat Trang Ceramic, Traditional ceramic village, Vietnamese ceramics

### はじめに

日本の陶磁器といえば、美濃焼、有田焼、瀬戸焼などが有名であるが、ベトナムでは陶

磁器といえば、バッチャンが有名な陶磁器生産の村である。「スゲマットといえば、ガ・ソン<sup>(注1)</sup>地区のことで、レンガといえばバッチャン村のことである。」という話がベトナム国内に伝わっている。ベトナムの陶磁器は1万年近く前のホアビン (Hoa Binh) 文化<sup>(注2)</sup>の終わりごろ・バクソン (Bac Son) 文化<sup>(注3)</sup>の最初ごろから始まった。リー王朝 (LY・李朝1010-1225)、チャン朝 (TRAN・陳朝1226-1400)、レ朝 (LE・黎朝1428-1527)、マック朝 (MAC・莫朝1527-1592) にベトナムは、国内向けの製品だけでなく、海外輸出にも対応するために、器種と釉薬の色において様々な製品を生産していた。ベトナムの代表的な窯場はバッチャン窯、バクニン省のトーハ窯、フーラン窯、ナムサック窯などがあげられる。また、ベトナム中部にはもともとチャンパ王国の窯場があり、ベトナムの南進と共に衰退していった歴史があるが、資料がなくて、解明されていない。阮王朝時代の都フエにも窯場があったはずであるが、これも詳しい資料が残されていないので、よくわからない状態である。本稿はベトナムの代表的なバッチャンの発展過程を調べながらバッチャンの魅力について述べていきたい。

## 1. バッチャン村について

陶磁器の町として知られているバッチャン村 (ベトナム語: Xã Bát Tràng/社鉢場) は現在ベトナムのハノイ、ザーラム郡の村の一つでベトナムを代表する陶磁器の生産地である。ハノイ市街から南東に約13kmのホン川 (紅河) 沿いに位置する。黎朝の時代、バッチャンと呼ばれ、トゥアン・アン府 (Thuan An) ザーラム郡に所属する社の一つであるが、1831年になってから、バクニン省ザーラム郡に所属する社として知られていた。1945年から1949年にかけて、ザーラムはバクニン省ではなく、フンイエン省に所属する郡として変更された。また、1961年からザーラムは正式にハノイ市に所属する郡として認められ、現在に至っている (図1)。バッチャン村は1964年にバッチャン部落とザンカオ部落の二つの自然村を統括する行政単位として設置された (Phan Huy Lê, 1995: 11)。

ハノイ市人民委員会はこのほど、同市ザーラム郡にある陶芸村のバッチャン村を市公認の観光地として認定する決定3936/QĐ-UBNDを公布した。現在、バッチャン村では企業200社と1000世帯が陶磁器の生産・販売を行っており、地域内外の数万人に安定した雇用と収入を生み出している。2018年における同村の1人当たりの平均年収は6000万 VND (約28万6000円) 余りと推定される。

陶磁器生産地のバッチャンは15世紀ごろ、陶器の村として記録に残っている。当時バッチャンは、中国・明朝への貢ぎ物の碗を作る村として、同じく明への献上物・黒布を作っていた Hue Can 村とともにその名を残している (Nguyễn Trãi, 1435 : 30)。また、『大越史記全書』によると、1352年に初めてバッチャンという名前が出ていることから、バッチャン村は陶器生産地だと知られるのは14世紀であると考えられている。

バッチャン村は、元々レンガ造りが盛んであったことから、1000年を超えるレンガ造りの窯がバッチャン村の独特の景観を作っており、大小約100軒の工房では世界各地に向けた高品質の製品が生み出され、現在でもあちこちに美しい陶磁器が積み上げられた店が立ち並ぶ。

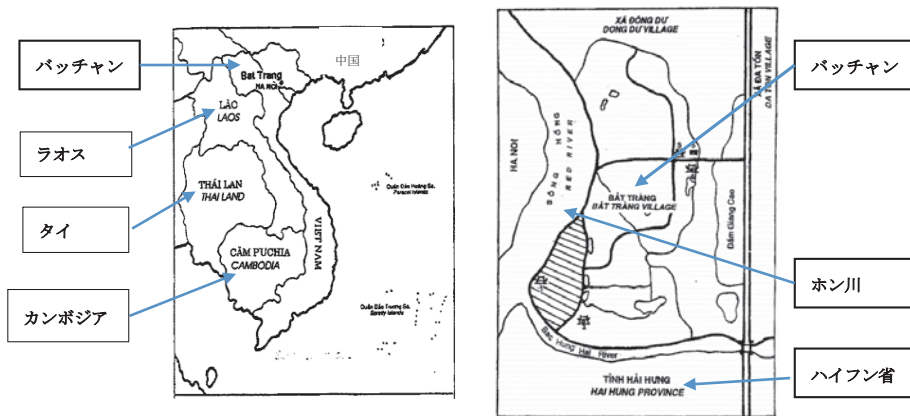


図1：バッチャン村の地図 (Phan Huy Le, 1995) に加筆

## 2. バッチャン焼のあけぼの

『大越史記全書』とグエン・チャイ (Nguyen Trai・阮鷹, 1380-1442) が作成した『輿地誌』(抑齋遺集南越輿地誌)によると、バッチャン村は李朝時代から成立している。資料は不明であるが、伝説によると、1010年リコンウアン王(李公蘊)がニンビン省ホアルー地区からタンロン(現在のハノイ)に遷都するとき、ニンビン省の住人で、有名な陶器を生産する5つの家族は遷都をきっかけに家族の伝統工芸を拡大するためにタンロンまで移動した。彼らはチャン氏 (Tran)、グエン氏 (Nguyen)、レ氏 (Le)、ファム氏 (Pham)、ヴァン氏 (Vuong) である。彼らはバッチャン村で良い質のカオリンを見つけたので、バッチャン村に住むことを決め、バッチャン村に住んでいるグエン氏と協力して陶器を生産し

続けた。バッチャン焼の開始はこの時期だと伝わっている。

上記の伝説以外に次のような話も伝わっている。同期に大越国<sup>(注4)</sup> (Dai Viet・ダイヴィエト国) はフア・ビン・キウ (Hua Vinh Kieu)、ダォ・チー・ティエン (Dao Tri Tien)、ルー・フォン・トゥー (Luu Phuong Tu) の3名の学習者を中国の北宋朝 (960-1127) に派遣した。派遣時期が終わってからの帰路、彼らは韶州 (現在の広東) に寄り、陶器産地を見つけて、その技術を学んだ。復帰してから大越国にある陶器生産村で学んで技術を広げた。フア・ビン・キウはバッチャン村で白色釉薬の作り方、ダォ・チー・ティエンはトー・ハ村 (Tho Ha・バクザン省) で黄色・赤色の釉薬の作り方、ルー・フォン・トゥーはフー・ラン (Phu Lang・バクニン省) で赤色・濃い黄色の作り方を広げた。当時、優秀な技術によって作られたバッチャン焼は、皇室でも使用されるようになった。

以下、バッチャン焼の歴史について、年代を追いながらまとめていきたい。

#### バッチャン焼の「文字」資料の出現 (15世紀)

バッチャンの製品に「文字」が現れた時期である。元々レンガの産地であったバッチャン村は最初頃に皇室向けの陶器を生産したが、バッチャンが繁栄したのは黎朝 (1428~1527)、マック朝 (1527~1592) の時代である (Phan Huy Lê, 1995: 15頁)。莫朝下で実施された商業抑制政策の廃止政策が、ベトナムに商業の活発化をもたらした頃である。15世紀ごろからバッチャン村で生産された製品に生産年、注文名、生産者の名も付けるものが現れた。注文した製品の中には、フック・チャン皇女 (Phuc Trang, 生死日不明)、ガン・クァン・コン王婿 (Ngan Quan Cong, 生死日不明)、マック・ゴック・リエン王婿 (Mac Ngoc Lien・莫玉璉, 1528-1594) など莫朝の皇族名が書いてあるものもある (Phan Huy Lê, 1995: 15頁)。莫朝の宮廷で用いられたのみならず、北部周辺の庶民向けの製品も出土した。また、寺で使われた仏具も現れ、ボイ・ケー寺 (Boi Khe, ハ・ティー省)、ダイ・ビ寺 (Dai Bi, タイ・ビン省)、タン・クァン寺 (Thanh Quang, ナン・ハー省)、マイフック神社 (Mai Phuc, ハノイ) などで見つかっている (Phan Huy Lê, 1995: 15頁)。

この時期の製品には生産者名も残っている。その中でトルコ共和国のトプカプ宮殿で見つかった染付瓶にはブイ氏 (Bui, ナン・サック地区) の名前が残っており、生産年は1450年である。当時、バッチャン村の資料にはヴー・ゴ・タイエン氏 (Vu Ngo Tien)、ブイ・ティ・ドー氏 (Bui Thi Do)、ホアン・ティ・ヴェー氏 (Hoang Thi Ve)、ドー・フ氏 (Do Phu)、ドー・サアン・ヴィ氏 (Do Xuan Vi) などが有名な生産者として登録されている。

見つかった製品を見ると、バッチャン焼は15世紀より前に生産されたが、15世紀末に「文字」の入った製品が流通されたことにより、広く知られるようになる。

### バッチャン焼の繁栄（15～17世紀）

1371年から中国の明朝は民間貿易を制限し、海禁令によってアジア市場に中国陶磁器の供給が途絶えると、その穴を埋めるべく、ベトナム・カンボジア・タイでは輸出用陶磁器が盛んに製造されて技術や生産量が伸長し、東は日本から西はエジプト・トルコまで広く諸外国に輸出された（佐久間，1992 217-219頁）。これをきっかけに東南アジア諸国と共にベトナムは海上貿易活動が活発になった。中国の陶磁器の輸出が制限され、バッチャン焼はベトナム国内向けの製品と東南アジア市場に拡大できた。すなわち、海禁によって、中国の陶磁器が東南アジアに姿を消したので、ベトナムのバッチャン焼とハイズオン省チュダウ焼（CHU DAU）は東南アジアの諸国に現れる機会が生まれ、国内でも大衆向けの陶器から貴族階級の為の高級品まで幅広い商品を供給していた（Phan Huy Lê, 1995：16頁）。

そして、1509年ポルトガルの船隊がマラッカに姿を現したことは新時代の到来を告げるものであった。マラッカ王国は1511年にポルトガル人によって占領され、東アジア、東南アジアにおける彼らの基地となった。1596年にはオランダ、1600年にはイギリスの船隊の来航が始まった。16-17世紀には多くのヨーロッパ諸国が貿易活動を拡大し、商船がアジアに向かい、オランダ、イギリス、ポルトガル、スペインはモルッカ諸島と日本・中国間の貿易の覇権をめぐる互いに争った。1623年にイギリス東インド会社はモルッカ諸島と日中貿易から撤退し、活動の舞台をベンガル湾周辺の諸国に求めるようになった（生田，1984：5頁）。一方、明朝は1567年に月港開港を上奏すると海禁を緩和し、漳州月港から商人の出海を認めた（Phan Huy Lê, 1995：15頁）。月港開港により、中国人海商は呂宋等東洋21港、暹羅・旧港・柬埔寨等西洋南アジア43港と台湾2港への渡航が認められた（佐久間，1992：253-343頁）。しかし、中国は日本への輸出製品を限定したため、日本は朱印船制度を実施した。1592年日本の軍事的支配者であった関白豊臣秀吉は外国と貿易するジャンク船に9通の渡航許可証を与えたのだが、このうちの1通は北部ベトナムへ向う船に与えられたものであった（Robert, 1980：54頁）。ベトナムの年代記である『大越史記全書』の記述は、1550年代に日本人の商人や海賊がベトナムの沿岸に現れていたことを示唆している。この事実は1592年に渡航許可証が発行される以前に日本人がすでにベトナム

を訪れていた可能性を示している。また、1604年から1634年の間、331隻以上の日本船が朱印状を得て海外に渡航したが、ベトナムのコーチシナ (Dang Trong) とトンキン<sup>(註5)</sup> (Dang Ngoai) に121隻渡航した (Phan Huy Lê, 1995 : 15頁)。

また、15～17世紀のバッチャンはベトナム貿易陶磁の北部における生産拠点であった。そして、二大商業地であり海外への玄関口でもあるタンロンとフンイエン省フォーヒエン (Pho Hien)、二つの町の間を流れる紅川沿いに位置していたバッチャンは地理的にも恵まれていたのである。

その上、この時期はオランダ東インド会社によりベトナムの陶器が購入され、東南アジア・日本に運ばれた。1990年までの発掘結果によると、東南アジア・日本などで発掘した32ヶ所で出土したベトナムの陶器、バッチャン焼は15～17世紀の製品だと認められる (Phan Huy Lê, 1995 : 16頁)。また、ウィリアム・ダンピア<sup>(註6)</sup> (Wiliam Dampier) が書いた “Một chuyến đến đàng ngoài 1688” 「1688年ベトナムのトンキンへの旅」には ヨーロッパ商船によってベトナム陶器がマレーシア、インドネシアのスマトラ (Sumatra) 島、インドのベンガルなどへ運ばれた (Nguyen Long, 1992 : 55-56頁)。その上、1634年オランダ東インド会社のホイアン商館長アブラハム・ダイケル (Abraham Duijker) はベトナムの陶磁器を24720購入した (T.Vorker, 1971 : 210頁)。陶器以外、レンガも購入した。当時、バッチャン村の人は製品の量によって税金を納めており、宮廷にはバッチャン焼そのもので支払った。16-17世紀はバッチャン焼が最も繁栄した時期だと言えるだろう。

### バッチャン焼の繁栄の陰り (17世紀末～19世紀)

16-17世紀に繁栄を極めたバッチャン焼とベトナム陶磁であったが、17世紀末になると、その繁栄に陰りが見え始める。ヨーロッパでは産業革命により、新たな消耗品の需要が高まっていた。また、1684年に清が台湾を奪回し、渡航禁止条例を撤廃したのをうけ、良質の中国産陶器が海外に大量に流出し始める。完成度の高い中国陶磁器に、ベトナム陶磁器は太刀打ちできない。さらに、そこへ日本の鎖国政策も影響する。元々日本国内の産物 (銀・銅など) を保護する為の政策であったが、やがて、それまで東南アジアからの輸入に頼っていた絹・砂糖・陶磁器などの国内での生産力が高まるかたちとなり、それらの物を輸入する必要性は薄れていく (Phan Huy Lê, 1995 : 16頁)。また、当時阮朝は貿易の抑制政策をとったので、ベトナム貿易陶磁を衰退へと追い込んでいった。ベトナム国内で、陶磁窯が一つ、また一つと姿を消していく。その中で15～16世紀に繁栄したチュウダウ焼の陶



器生産地も姿を失くした。しかしながら、バッチャンは、歴史の流れの影響を少なからずうけつつも、国内で陶器、レンガ、供養品など宮廷で用いられたのみならず、庶民向けの製品も生産できたので、大きな国内需要に支えられて存続する。そして、ベトナム陶磁生産拠点として現代まで君臨している。バッチャン焼のコレクションには永盛（Vinh Thinh, 1705-1719）、鄭樽（Vinh Hư 2, 1701-?）、黎顯宗（Lê Hiến Tông, 年号：Cảnh Hưng, 1717-1786）、光中（Quang Trung, 1788-92）、嘉隆（Gia Long, 1802-19）など王朝年号が書いてある製品が登録されている。これらはバッチャン焼が18～19世紀でも生産し続けていた証拠である。

### フランス植民地時代から現在まで（19世紀以降）

19世紀半ばから20世紀初めにかけて、フランス植民地体制下でのバッチャン村の陶磁器生産は低迷の状態が続いた。輸出市場を失ったバッチャン村では、国内向けに安価な茶碗や壺などの日用品や煉瓦・タイルなどの建設用陶磁器の生産が細々と続けられた。輸出市場がなくなり、国内向けの製品を中心に生産したが、売れなかった。その上、バッチャン村の多くの陶磁器生産者は資金不足のために窯を維持できず、数少ない家族経営の窯元のもとで雇われ陶工として働いていた。1907年にはバッチャン村の窯は17基だけとなった（Hy V. Luong, 1997：188頁）。

1954年以降、ベトナムの民主共和国政府は社会主義経済体制期に入り、工芸品の生産は家計単位の経済活動であったが、この生産体制は、1954年から1986年までは、合作社のもとでの「手工芸合作社政策」によるものとなる。一家族経営およびそこでの雇用労働者として生産を行っていた陶磁器生産者は国有企業に雇用されるか合作社の構成員として組織化されていった。

1958年から1984年にかけて、バッチャン村では国有企業3社、合作社6社、生産組6組が組織された（荒神，2006：235頁）。バッチャン村の陶磁器生産の中心となったのは、1958年に設立されたバッチャン陶磁器会社と1962年に組織されたホップタイン（Hop Thanh）合作社である。設立当初のバッチャン陶磁器会社の雇用者数は1250人にのぼる。バッチャン陶磁器会社やホップタイン合作社に加えて、他の合作社や生産組が各々80～130あまりの窯を管理し、国家計画に従った茶碗や建設用陶磁器の生産、旧社会主義諸国の市場に向けた輸出製品の生産を行った（荒神，2006：236頁）。

しかし、1986年以降、ドイモイ政策後には合作社が解体され、合作社の集団耕地が再び

個々の農家に割り当てられるようになるのと同時に、工芸生産も再び農村における家族経営として再開されるようになり、各地に「工芸村」が復興したため、バッチャンも家族経営が復活した。

1990年代からベトナムの手工芸品全体の輸出が増加し、陶磁器の輸出も増加してきた。バッチャンの陶磁器の輸出も拡大した。工芸生産に携わる多くの世帯が家族経営・家内工業として工芸品を生産しており、うち80%の世帯では販売にも関わっている。また、2000年以降、国営だった企業が徐々に株式会社化して、政府による出資割合は100%から50%へ、そして企業によっては0%へとその割合を徐々に減らしてきた。伝統的な生産のみならず、新しい体制では政府からの支援も増え、生産高も増加してきた（鎌田、2006：209-211頁）。

現在、バッチャン焼は非常に豊富な種類があり、湯のみ、醤油瓶、マグカップ、カップ&ソーサー、茶碗、急須、大小の皿などがある。また、絵柄も多彩で竹、トンボ、金魚、菊、蓮など職人の技巧の業が垣間見える。バッチャン村の村長報告によると、販売先は、国内はもちろん、海外では日本、台湾、韓国、ニュージーランド、ヨーロッパの国々、アメリカなどが主な輸出先となっている。

### 3. バッチャン焼の製品の分類

バッチャン焼は豊富な種類がある。ベトナム歴史博物館で保管する14世紀から19世紀までの製品、そして、現在生産している製品の種類をみると、日用品・装飾用陶磁器・建設用陶磁器・飾り物に分けられる。現在、バッチャン焼の絵柄は沢山あるが、伝統的にトンボや菊の花、蓮の花、竹、金魚、芋などの身近な自然をモチーフにした物が絵柄として多く描かれた。ここではベトナム歴史博物館で展示されているバッチャン焼と現地で調査した際に撮った写真を中心にまとめていく。

#### 日用品

バッチャン村で14世紀から現在までの日用品の陶磁器は主に大小皿、碗、花瓶、鉢(Au)、壺(Jar)、ボウル、茶碗、カップ&ソーサー、酒瓶、石灰壺 Binh voi などが生産されている。現在、染付・色絵・青磁・白磁など様々な種類があるが、ベトナム歴史博物館で保管するバッチャン焼は14世紀から19世紀の間の製品はほとんど染付や鉄絵であり、その他に



白磁もあるが少ない。

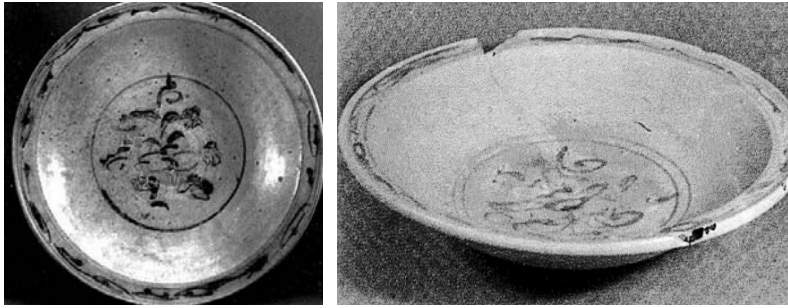


図2：染付菊花文皿 14-15世紀（ベトナム歴史博物館より）

図2の染付菊花文皿は口線部に唐草がめぐる製品で、中央に菊の花と葉が描かれる。発掘では同じものが多く発見されており、また、皿の内側には窯道具であるハマの目跡がみられ、14世紀末～15世紀頭の東南アジアで染付を生産し始めた頃の製品だと思われる。



図3：染付鳳凰文碗15-16世紀



図4：染付龍雲碗19世紀（ベトナム歴史博物館より）

図3は口線部に唐草文がめぐり、外側に飛んでいる鳳凰と雲が描かれる。また、染付龍雲碗（図4）は高台が高く、龍雲文が描かれており、上流階級で使われたと思われる。その上、龍はベトナムの文化で共有されている伝承や神話における伝説上の生物である。龍は非常に強力な神話のシンボルで男性を、鳳凰は女性を象徴することが知られている。ベトナム人の習慣からみると、皇室か貴族が使用したと考えられる。

現在、碗や皿の種類は様々で、普段生活で使用するものは鳳凰、龍など使わずに自然の背景をモチーフにした絵柄が多い、形も葉形、動物形のものもある（図5・6）。



図5：青磁碗皿



図6：色絵碗皿（筆者撮影）



図7：染付花草カップ15-16世紀



図8：染付竹文大ソーサー19世紀

（ベトナム歴史博物館より）

染付花草文カップ（図7）は花草文や龍、鳳凰が描かれるものが多く確認されており、形も様々である。図8は一つのカップ用のソーサーではなく、6名分の小さなカップや湯のみのソーサーである。内側に竹文が描かれ、19世紀にのみ生産された製品だと多くの研究者によって認められる。



図9：丸湯のみ



図10：梅文の湯のみ（筆者撮影）



図11：染付煙管18世紀



図12：現在の染付煙管（ベトナム歴史博物館より）

図11は刻みタバコの葉を詰めて火をつけ、その煙を吸う器具である。金属製の煙管と違い、昔のベトナムでは陶磁器の煙管台と竹の管に雁首と吸口をつけたものを使う習慣があったが、当時陶磁器の煙管を使ったのは貴族のみである。現在の煙管（図12）は種類が多く、単純な陶磁器ではなく銅や銀などの金属を使い、口縁などを飾るものが多い。図12には染付で口縁部に銅が付いている。



図13：染付石灰壺17世紀 図14：白濁石灰壺17世紀  
（ベトナム歴史博物館より）



図15：現在バッチャンの石灰壺（筆者撮影）

石灰壺（図13）には花草文が描かれ、檳榔形の把手が付いている。また、図14には白濁

釉をかけられ、把手に「寿」字があり、把手から高台まで線のようなものが付いている。当時、檳榔子を噛むのはベトナムの地域で行われたが、工夫を凝らした高級な陶磁器のものを使用したのは上流階級である。花草文以外、龍雲文が描かれた石灰壺もあった。

また、檳榔子を噛むのはベトナム以外にもアジアの広い地域で行われたが、ベトナム文化では特別な意味がある。昔、ベトナムで男女とも檳榔子を噛む習慣があり、“**miếng trầu là đầu câu chuyện**” - 檳榔子を食べたら話が始まるという話が伝わっている。初めて会った人でも一緒に檳榔子を食べる間に仲良くなり話しやすくなる。現在、檳榔子を噛む習慣は少なくなったが、非都市部の高齢女性の間ではまだ噛む習慣が残る。現在でもバッチャン村などで石灰壺を生産し続けているが、檳榔子を噛む習慣用ではなく飾り物として多くの家庭に置かれている（図15）。

また、14世紀から19世紀の間には陶磁器のボウルも使用された。図16には酸化鉄がかけられ、4ヶ所に「福等山河」字が描かれる。「福等山河」とは相手の幸福を祈るという意味である。昔、洗面所がなかったため、ボウルを使う習慣があったが、誰でも使えるものではなかった。陶磁器は元々高級なもので、上流階級で流行した。ベトナムの習慣では尊敬する人に対して「福等山河」や「壽比南山」など描かれるものを差し上げるので、図16は地位が高い人か家族であれば両親が使ったものだと考えられる。酸化鉄ボウル以外、花草文描かれる白濁釉ボウルも見つけた。一方、現在の陶磁器のボウル（図17）は洗面所に付けるもので、オンカウンター・壁付けタイプもあり、丸・三角など豊富である。

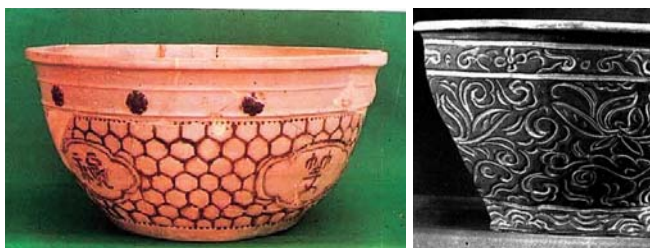


図16：酸化鉄ボウル（ベトナム歴史博物館より）



図17：洗面所に付けるボウル（筆者撮影）



皿、碗、花瓶、ボウルなど以外、酒瓶も多く利用された。図18には菊花文、蓮花形が外面に付いているので、工夫された製品で高級なものだと評価される。また、図19は下の部分に蓮花があり、上の部分に「Nghê」（ゲ）の形が付いている。「Nghê」はユニコーンやライオンとは異なり、ベトナム人の伝説上の動物である。ゲは犬の変身であり、ベトナム人の「親友」であるため、よく陶磁器など高級な製品に描かれている。ベトナム人にとって犬は家を守る動物で、「Nghê」は人を悪魔から守る神として知られている。



図18：染付酒瓶16-17世紀



図19：染付酒瓶19世紀

(ベトナム歴史博物館より)

上記のバッチャンの製品は14世紀から19世紀の代表的なもので、現在の製品は伝統の文様やデザインを生産し続けながら、消費者のニーズに応じて生産しているため、非常に豊富な種類がある。仏教は当時のベトナムの生活への影響も大きかったので、蓮花、菊花、鳳凰、龍雲などの模様がよく使用され、現在でも陶磁器に描かれている。伝統的な文様以外に絵柄も多彩で竹、トンボ、金魚などの文様には職人の技巧の業が垣間見える。

### 装飾用陶磁器

ベトナムは54もの民族を持つ多民族国家である。54民族はそれぞれ独自の文化を持ち、中には独自の言語までも持っている。この54民族それぞれが特別な習慣・信仰をもっているため、ベトナムは多様な文化を有している国である。ベトナム人は太陽神や海神などの神様を祀る信仰があり、神様を祀る他に、ベトナム人は昔から教わってきた「水を飲んだら、その水源を覚えるべき」という伝統的な考えにしたがって、祖先崇拝と亡くなった人の念日を行うことを続ける習慣がある。ベトナム人の多くの家庭には、祖先崇拝壇があり、その祖先崇拝壇は荘重な所に配置されるのである。伝統的な祭壇には多種多様なものがあるが、昔から現在まで線香入れ、香炉、オイルランプ台、蠟燭台などがある。家庭によっ

て飾り物が違うが、祖先崇拜壇には基本的に物が置かれる。



図20：オイルランプ台14-15世紀  
(ベトナム歴史博物館より)



図21：現在のランプ台  
(筆者撮影)

図20・21は14-15世紀のオイルランプ台と現在のランプ台である。図20には鉄絵花草文、染付龍雲文など当時の代表な文様が描かれている。他には蓮花、菊花など文様もある。現在、ランプ台は陶磁器、鉄、銅と合わせて造るものが増えてきた。図21にはランプの首部は陶磁器であるが、足の部分は銅で造られた。

オイルランプ以外にベトナムでは蠟燭台も多く使用された。種類は様々で工夫されるものが多い。図22はゲの背中に乗せられた蠟燭台で、図23は龍形の蠟燭台である。現在、このような工夫されたものに加えて、一般の蠟燭台も流通している。染付、青磁、白磁で蓮花形、菊花など種類が豊富である。



図22：鉄絵「ゲ」形蠟燭台18世紀



図23：鉄絵龍形蠟燭台18世紀

(ベトナム歴史博物館より)



図24：現在の蠟燭台 (筆者撮影)



オイルランプ台、蠟燭台以外、線香入れと香炉は祭壇に欠かせないものである。線香入れは丸いもののほうが多いが、四角形の線香入れも現れた。外側には蓮花、菊花など唐草や龍、鶴の文様が描かれている。図25・26ともに線香を立てて使った後、線香を寝かせて供えるための香炉になる。また、図26には四角で周辺に龍形が二段付けられる。図27は現在の線香入れで龍雲文と蓮花が描かれている。仏教の影響が強かったので、龍、ライオン、蓮花、菊花文がよく使用される。



図25：花草文長香炉18世紀

(ベトナム歴史博物館より)



図26：龍鳳凰文長香炉19世紀末



図27：現在の長香炉 (筆者撮影)



長香炉のほかに、火舎香炉が良く使用される (図28・29)。ベトナムでは昔から沈香を入れて炊く香炉に使う。火舎香炉は長香炉とは違い、煙出しのための穴があいた蓋が付いた香炉になる。火舎香炉はいつも三本か四本足のため、1本の足の方を前側に向けて置く。



図28：染付龍形火舎香炉19世紀



図29：ライオン形火舎香炉19世紀

(ベトナム歴史博物館より)

図28は染付で龍形の蓋が付けられ、両方の把手も龍形である。図29には蓋が獅子形で、把手も獅子である。また、祭壇に火舎香炉と2つのランプで構成され、礼拝セットとして使用される（図30）。現在、獅子形や龍形が付けられる火舎香炉には鶴形のランプがよく使用される。火舎香炉の蓋が獅子で、龍か獅子の把手がよく付けられる。大きな祭壇を持つ家族であれば、図31のように、火舎香炉、鶴形のランプ、長香炉、花瓶、酒瓶、カップなどが含まれる。



図30：現在の火舎香炉



図31：祭壇の礼拝セット（筆者撮影）

バッチャン村で生産した装飾用陶磁器には龍、獅子、蓮花、菊花が多く、ベトナムの文化にも深い関係がある。ベトナムの文化では龍、獅子は信仰の中で特別な位置を占めている。昔の人々の観念では、龍は王様の絶対的権威を象徴した。龍はベトナム人にとって、想像上の超自然的な動物であるが、龍の姿は社会生活の中で良くみられる。伝統的な観念によると、龍、獅子は十二支などの動物の中でも、幸運と精通を象徴している。龍は、名誉、権力の象徴で、獅子は権力の象徴である。ベトナム人は、辰年は縁起が良い動物と信じられている。

## アンティーク

バッチャン焼の種類は多様で、アンティークとして飾って愛でる製品は14世紀からあったようで、ベトナム歴史博物館が保管する資料から代表なものを調べていきたい。14世紀から19世紀の間に、家のモデル、観音像・弥勒像の他、馬・獅子・ゲなどのマスコットの各種類の像がある。まず、皇帝や家屋のモデル（図32・33）が現れる。どこに置かれるものであるか資料不明であるが、飾りものだと認められる。図32は白釉の陶器で屋根の先が湾曲している。皇帝モデルには菊花、蓮花、龍形、ゲなど様々な文様がある。また、家屋のモデルには、青釉や鉄絵などのモデルがあり、図33には龍雲・ゲ文・菩提樹文が描かれる。

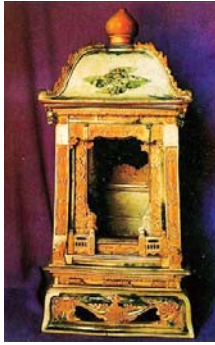


図32：皇帝のモデル17世紀  
(18世紀・ベトナム歴史博物館より)

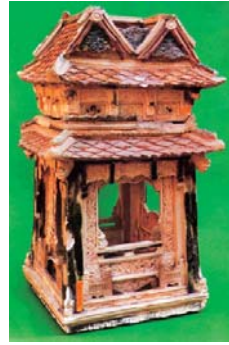


図33：家屋のモデル17世紀  
(18世紀・ベトナム歴史博物館より)

住まいモデルのほかに、マスコットの馬像・ゲ像・猿・蛇も現れる。図35には背中に「寿」字を載せるゲと太鼓の上に立つゲである。両方ともゲの首に楽器が巻かれ、足の部分には雲などが付けられる。また、図34に馬像で白釉が掛けられ、馬の首に楽器が巻かれ、背中には鐘がある。馬はベトナムの文化の中で長い間存在したものであり、賢く、力強く、記憶力が高い動物なので、ベトナムのことわざでは馬が非常に多く使用される。お互いの成功を祈るときには「馬到成功」(Mã đáo thành công)で、時間が経つのは早いとき“Bóng ngựa qua cửa sổ”など色々なことわざがある。現在でも馬像・ゲ像は各家で飾り物や贈り物として使用されている。また、図36には獅子のセットで、図37には猿と蛇の組み合わせられたもので頭部が猿で、体が蛇である。資料不明であるが、マスコットの動物は聖地に置かれたと考えられる。



図34：馬像17世紀

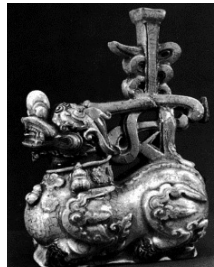


図35：「ゲ」像 17世紀 (ベトナム歴史博物館より)





図36：獅子像19世紀



図37：頭が猿で、体が蛇の象19世紀

(ベトナム歴史博物館より)

ベトナムでは10世紀から仏教が国教として重んじられたので、仏教に関わる像もかなり使用された。18世紀以降、馬像・ケ像などのほかには、観音像・弥勒菩薩（布袋）像・執金剛神像など仏教に深い関係がある象が現れた（図38・39）



図38：弥勒菩薩（布袋）像・執金剛神像18世紀

図39：観音像19世紀

(ベトナム歴史博物館より)

弥勒菩薩の化身である布袋像は（図38・左）座位姿勢で、膝に両方の手が載せ、腹部と胸を隠さないシャツを着る姿をしている。そして、広い額で、優しい笑顔である。ベトナムの文化では弥勒様は新しい時代の救世主といわれる佛様で、笑いの佛・ハッピーブッタともいわれ、幸運・財運・健康運を招く佛様として信仰されている。また、執金剛神像（右）は冠をかぶり、手に金剛杵を持ち、笑顔を見せる。一方、図39は19世紀の作品で、蓮台に座っている観音の姿である。

上記の製品は寺や祭壇など聖なるところに置かれたと考えられるが、家庭の飾り物として現在、種類が豊富である。その中で四君子の陶磁器が多く使用される。ベトナムの文化では四君子は松菊竹梅ということで、幸運、運、繁栄のシンボルである。絵画に興味がある人であれば松菊竹梅の陶磁器の絵画は欠かせないものである（図40）。また、バッチャン村では、四君子以外にハノイの旧市街、フエなど各地方のベトナム風景を描いた陶画も焼かれている（図41）。



また、陶磁器の風鈴を玄関に飾る家庭も多い(図42)。風鈴は中国から伝わった「風鐸」がもとになったといわれる。家で出入りする時に鳴り響く、美しい音色の風鈴の音を聴くことで爽やかな気分させるだけでなく、ベトナム文化には玄関に飾る風鈴は悪い気運を中和させる役割を果たしている。

バッチャン村で生産するアンティークは多様な種類があり、同じものが大量に作られるが、全部手作業で作られる。絵付けは手作業で、専門の職人がひとつひとつ、機械のように同じ図柄を昔から描いている。



図40：松菊竹梅（筆者撮影）



図41：ハノイの旧市街絵画・ホアンキエム湖絵画（筆者撮影）



図42：バッチャンの風鈴（筆者撮影）

## 建設用の陶磁器

バッチャン村で建築用の陶器、室内外の陶製品を生産することで先端のブランドを作り出している。バッチャン村は元々レンガ生産地として有名で、現在でも日用品、装飾用品、アンティーク以外に伝統的なレンガを生産し続けている。バッチャン村の陶器づくりの技を継承しながら、デザインの創造と現代の技術を使用することで、国内外の市場に信用を得ている。バッチャン村で生産する製品は寺や住宅で多く使用される。住宅の換気システムの一つに換気レンガがある(図43)。レンガは耐熱性能・蓄熱性能を持っているので「夏は涼しく・冬はあたたかい」と知られ、今でもレンガ造りの建築物が残っている。バッチャン村のレンガは形が様々でデザインが豊富であるため、人々に愛され、ベトナムの文学にも書かれる。

“Trên trời có đám mây xanh  
Ở giữa mây trắng, xung quanh mây vàng.  
Ước gì anh lấy được nàng,  
Để anh mua gạch Bát tràng về xây”

(訳：空に青い雲がある。青い雲の真ん中に白い雲があって、周りには黄色い雲がある。  
あなたと結婚出来たら、バッチャンのレンガを購入してレンガ造りの家を造る。)

換気レンガの他には屋根飾り陶磁器瓦、タイルなど(図44~47)も生産されている。図44は一般の住宅で屋根飾り物として使用されるが、図45の龍形の屋根飾り物は寺や神社で使用される。また、図47のタイルはバッチャン村では床、壁、トイレなどに使用される。施釉タイルと無釉タイルに区分され、目的に応じて内装壁タイル(内装モザイクタイル・内装床タイル・内装床モザイクタイル)と外装壁タイル(外装壁モザイクタイル・外装床タイル・外装床モザイクタイル)に分けられる。形は四角、円形、三角など多様である。



図43：換気レンガ(筆者撮影)





図44：屋根飾り陶磁器瓦（筆者撮影）



図45：屋根飾り龍形（筆者撮影）



図46：レンガの住宅（筆者撮影）



図47：タイル（筆者撮影）

バッチャン村にはまだ古いレンガの建物が残り、ベトナムの伝統的な田舎の雰囲気を感じられる。そうした環境の中でバッチャン村は現在の消費者のニーズに応じて多様な製品を生産し、伝統的な技術を守りながら発展してきたので「伝統工芸村」として認められている。

## 終わりに—まとめにかえて—

ベトナムの首都ハノイから近いバッチャン村は紅河沿いに位置し、陶磁を作るには良質の土があるため、早い時期から陶磁を生産しはじめた。15～17世紀、ベトナム北部の2つの貿易中心地であるタンロンとフォーヒエンの間にあるバッチャン焼は、国内市場だけでなく、日本・中国・西洋の貿易商船によって海外にまで運ばれ、バッチャン焼の存在が知られるようになった。しかし、18世紀～19世紀には、阮王朝と鄭王朝が貿易政策を実行したため、輸出が厳しくなり、バッチャン焼は輸出できなかつた。しかし、1986年以来、経済改革のおかげで、伝統工芸に注目が集まっており、バッチャン焼は明るい時期に入った。500年経ってバッチャン焼は水運の発展したデルタ地帯という地の利を生かして、原料や製品の運搬も運河が利用されており、そこにはそのまま世界中に輸出されるしくみがある。現在、バッチャン陶磁はベトナムだけでなく、世界の他の国でも有名で、1990年以来、日

本、韓国、アメリカなどに輸出されている。また、バッチャン村は陶磁と漁業、そしてレンガ生産地として観光地化しており、国内外からの観光客に恵まれている。

#### 注記

- (注1) ベトナム北部のタインホア省の坊である。  
(注2) ベトナムにおける新石器時代前期に属する文化である。  
(注3) ベトナムのトンキン平野北部を中心とする中石器時代から新石器時代の文化である。  
(注4) 李公蘊が1009年に建てた李朝(李朝)は1054年以降国号を大越国(ダイベト、ダイヴィエト国)とし、ベトナム最初の長期権力となった。  
(注5) ベトナムの三つの地域の内、ベトナム南部は特にフランス支配時代にコーチシナと言われた。それに対して、ベトナム中部はアンナン(安南)、ベトナム北部はトンキン(東京)と言われた。  
(注6) ウィリアム・ダンピア(1651-1715)は、イングランドの海賊(バッカニア)、船長、作家、博物学観察者で、ニューホラント(オーストラリア)、ニューギニアを探検した最初のイングランド人である。世界周航を3回成し遂げた最初の人物である。

#### 参考文献

##### 日本語

1. 生田 滋(1984)「16世紀末のポルトガル海上帝国と東南アジア」東南アジア史学会(40)、東南アジア史学会
2. 鎌田 隆(2006)『ベトナムの可能性 ドイモイ政策の未来像』株式会社シーム
3. 佐久間 重男(1992)『日明関係史の研究』吉川弘文館
4. 樋口 博美(2013)「ベトナムの手工芸をめぐる生活とその支援 - ベトナム手工芸品見聞録から - 」専修大学社会科学研究所
5. 熊遠報(1997)「倭寇と明代の「海禁」」『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社

##### 英語

6. Hy V. Luong(1997) "Capitalism and Noncapitalist Ideologies in the Structure of Northern Vietnamese Ceramic Enterprises", in T. Brokk, and Hy. V Luong, eds., *Culture and Economy: The Shaping of Capitalism in Eastern Asia*, Ann Arbor: The University of Michigan Press
7. Nguyễn Long(1992), "*History Behind the Jar*" in *A thousand year of Stoneware Jars in the Philipines*", Jar Collector, Manila
8. Robert LeRoy Innes(1980) "*The Door Ajar: Japan's Foreign Trade in the Seventeenth Century*"[開きかけた扉: 17世紀における日本の対外貿易], The University of Michigan, 1980, p. 54.
9. T.Vorker(1971) "*Porcelain and the Dutch East India Company*", Leiden, FJ. Brill

##### ベトナム語

10. Nguyễn Trãi(1435) "Du địa chí"  
(Nguyen Trai (1435) 『抑齋遺集南越輿地誌』出版社不明)
11. Phan Huy Lê, Nguyễn Đình Chiên, Nguyễn Quang Ngọc(1995) "*Gôm sứ' Bát Tràng thế kỷ 14-19*", Nhà xuất bản Thế giới  
(Phan Huy Le, Nguyen Dinh Chien, Nguyen Quang Ngoc (1995) 『バッチャン焼 - 14世紀~19世紀』世界出版社)
12. William Dampier(2011) (Dịch giả: Hoang Anh Tuan) "*Một chuyến Du hành đến Đàng Ngoài 1688*", Nhà xuất bản Thế giới  
(William Dampier (2011) (ベトナム語訳: Hoang Anh Tuan)『1688年ベトナムのトンキンへの旅』世界出版社)

本研究は、JSPS 科研費 JP17F17304の助成を受けたものである。

なお、本文は、著者らが2018年8月および2019年11月に行ったベトナム・ハノイおよびバッチャンでの現地調査にもとづく報告である。グエンが主に執筆し、野上が日本語の校正を行なった。